信濃国分（僧）寺跡（上田市）探訪レポート

ついでに信濃国分寺跡に行きました

信濃国分寺跡史跡公園（国指定史跡）

国分寺は天平１３年（７４１年）、聖武天皇発布の詔勅にあるように「造塔の寺は、兼ねて国の華なり、必ず好処を択びて、実に長久なるべし」と、国の華である国分寺はその国の最も良い場所が選ばれ、信濃の国では、今の上田市が選ばれた。

昭和３８年から同４６年までの発掘調査の結果、中門・金堂・講堂・回廊・塔・僧房・築地塀・尼房・経蔵・北門などの遺構を確認あるいは推定することができ、寺域は、僧寺がおよそ東西１７６メートル、南北１７８メートル、尼寺は東西１４８メートル、南北１５０メートルと判明した。

これらの遺構の保存と活用のため、信濃国分寺跡史跡公園として整備され、全国で最初の史跡公園に指定された。

また、公園内の上田市立信濃国分寺資料館には、国分寺や上田地方の原始・古代の資料が展示され、国分寺跡から出土した瓦窯跡の観察施設も全国的に珍しいとされている。

信濃国分寺三重塔（国指定重要文化財）

「将門記」という本に、平将門と平貞盛が信濃の国の国分寺川原で戦ったと記されている。

信濃国分寺が今の場所に移ったのは、この合戦で焼失されてからともいわれている。

境内に建つ三重塔は、源頼朝が善光寺参詣の途中寄進したという伝説を持つが、様式からみて室町時代に建てられたものだろうという。

１月７日、８日の縁日には、全国で唯一の珍しいお守り蘇民将来符（そみんしょうらいふ）が売られ、土地の人は、この縁日もこの寺も親しみをこめて「八日堂（ようかどう）」と呼んでいる。

信濃国分寺跡
史跡公園

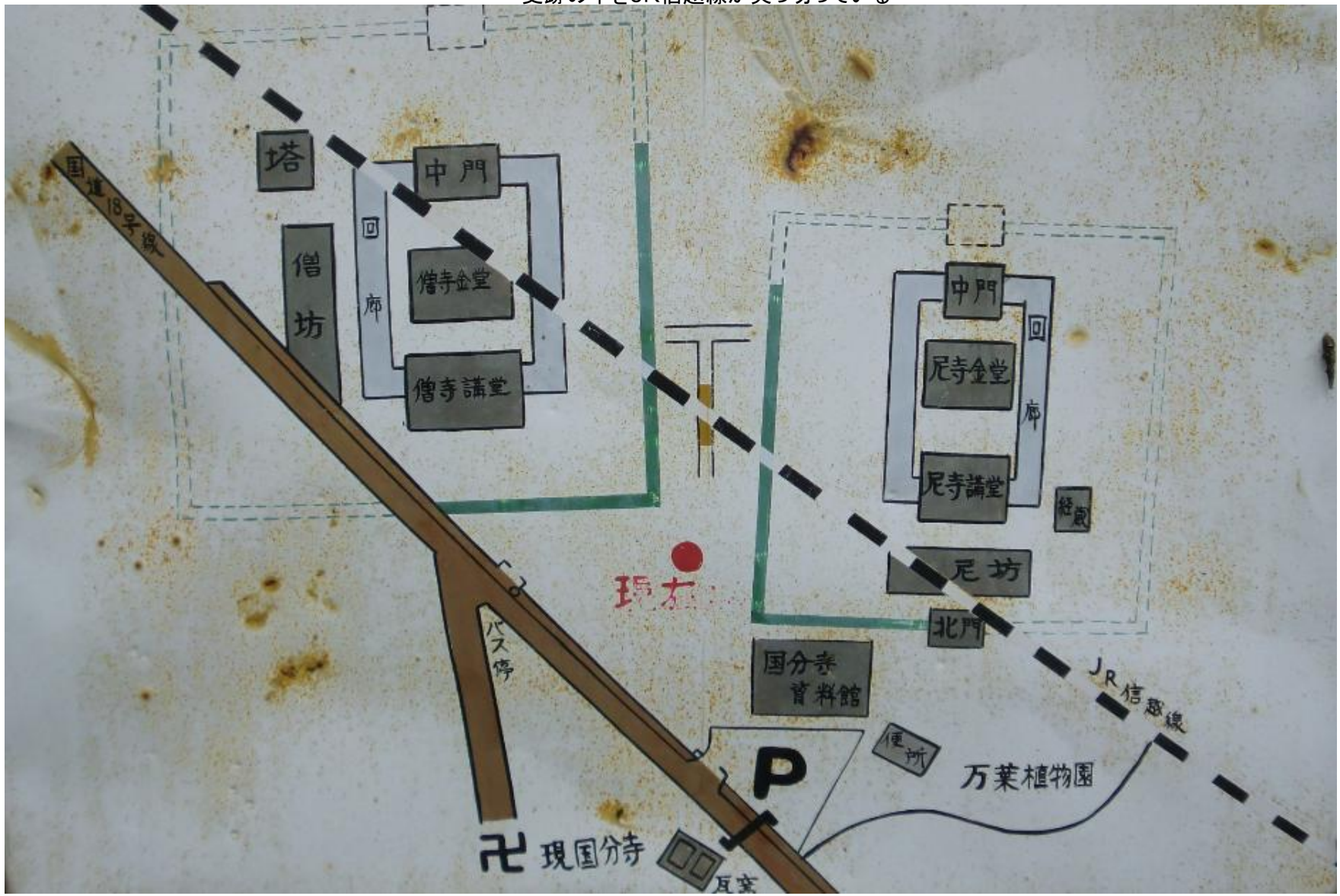
史跡公園となっている

上田市立信濃国分寺資料館
信濃国分寺跡 史跡公園
信濃国分寺資料館・
史跡公園利用者以外の
駐車を禁止します。
史跡 信濃国分寺跡

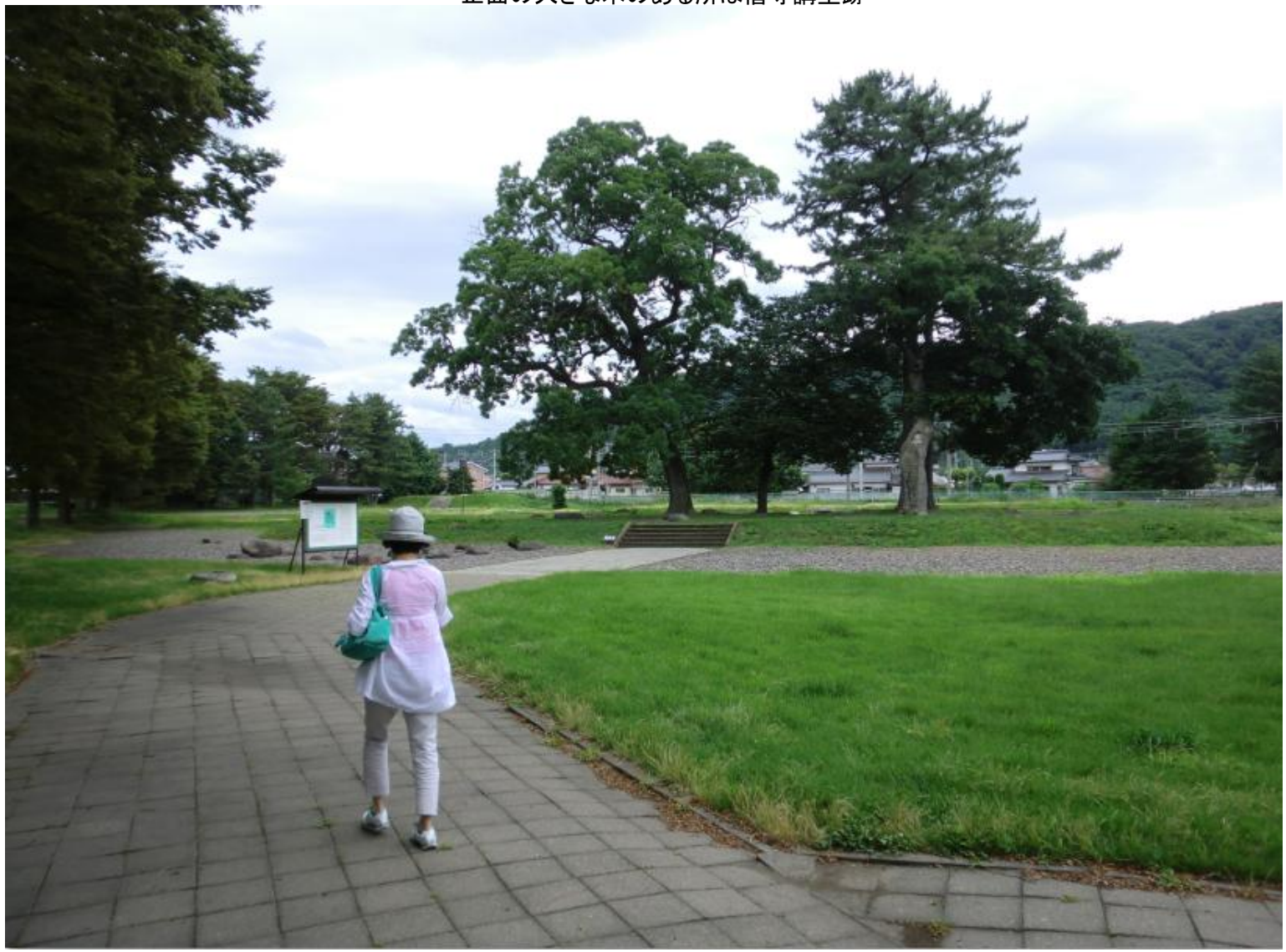
信濃国分寺資料館

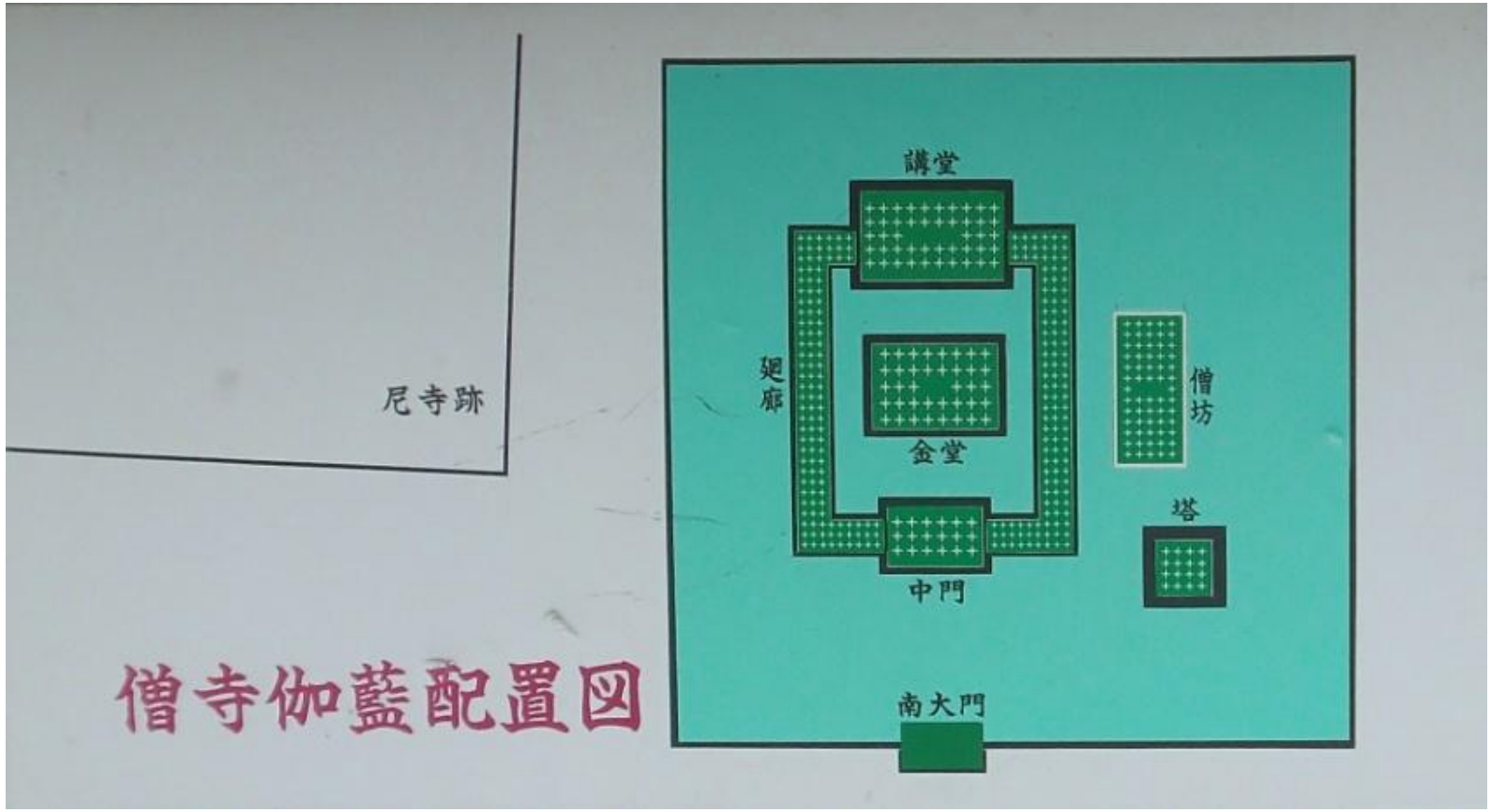
上田市立 信濃国分寺資料館

史跡の中をJR信越線が突っ切っている



正面の大きな木のある所は僧寺講堂跡





僧寺伽藍配置図

僧　寺　跡　案　内

信濃国分寺跡は、昭和38年(1963)から46年にかけての8回の発掘調査により、僧寺（金光明四天王護国之寺)と尼寺（法華滅罪之寺）の全容がわかりました。

ここ僧寺跡では、中門・金堂・講堂・回廊・塔・僧房の遺構が明らかにされ、南大門の位置も推定されました。100間（約177ｍ）四方の寺域のなかに、南大門・中門・金堂・講堂が南北一直線にならんでいます。中門と講堂は 回廊（複廊）でつながり、金堂の東南に　塔、東には僧房があります。このような伽藍配置を東大寺(国分寺)式といいます。

金堂は今の寺院の本堂にあたり、釈迦牟尼仏が安置され、国分寺の塔には金光明最勝王経（法舎利）がまつられました。　また、講堂は法を説き経を講ずる場所で、僧房は僧が生活する宿舎でした。

発掘調査では、古瓦をはじめ、須恵器・土師器・硯・鉄釘など多くの遺物が出土しました。創建期の八葉複弁蓮花文鐙瓦と均正唐草文宇瓦は東大寺や平城京跡のものと同類です。また「伊」「更」など 郡名を表したとみられる文字瓦もあります。これらはすべて信濃国分寺資料館に収蔵し、展示されています。

遺構は埋め戻しによる基壇復元方式がとられています。建物跡の 表面をソイルセメントで覆い、芝生や 玉砂利で区画し、築地跡にはドウダンツツジを植え、寺域が よくわかるようになっています。

講堂跡

講堂の礎石か？

金堂跡から講堂跡を見る

史跡信濃国分寺跡
僧寺講堂跡
高さ約50cmの基壇と、本来50個ある礎石のうち27個が良好な状態で残っていました。基壇の周囲には玉石敷きの雨落溝も良好に検出されました。
基壇の規模は東西34m×南北20mで、建物は正面28.8m、側面14mの9×4間と確認されました。

金堂跡（JR信越線の線路が走る）

史跡信濃国分寺跡
僧寺金堂跡
基壇周囲の一部には石組の雨落溝や石敷遺構がきわめて良好に検出されました。また、石段の部材と思われる凝灰岩の切石も発見されています。基壇は東西29.7m×南北19.3mで、推定される建物規模は正面24.2m、側面14.4mの7×4間です。

前方は塔跡（右手に線路が走る）

塔跡

これは心柱の礎石か？

塔跡から正面に金堂を見る（一段高い部分）

手前が回廊部分、後方が僧坊部分

正面は僧坊部分

廻廊跡

道路の反対側に瓦窯跡があった

信濃国分寺
瓦窯跡
観察施設

この建物は瓦窯跡の覆屋

瓦窯跡観察施設

この窯跡は昭和四十二年二月運輸会社建設工事の際発見され、同年三月の緊急発掘調査により、半地下式平窯跡二基であることが確認された。

これは尼寺金堂跡の北東約二百メートルに位置し、窯の中心線は二基とも東偏二十四度三十分で、中心線の間隔は四、三メートルである。構造は瓦を使って構築した平窯で焚口は大きい河原石を左右に立て、その上に大石をのせてある。

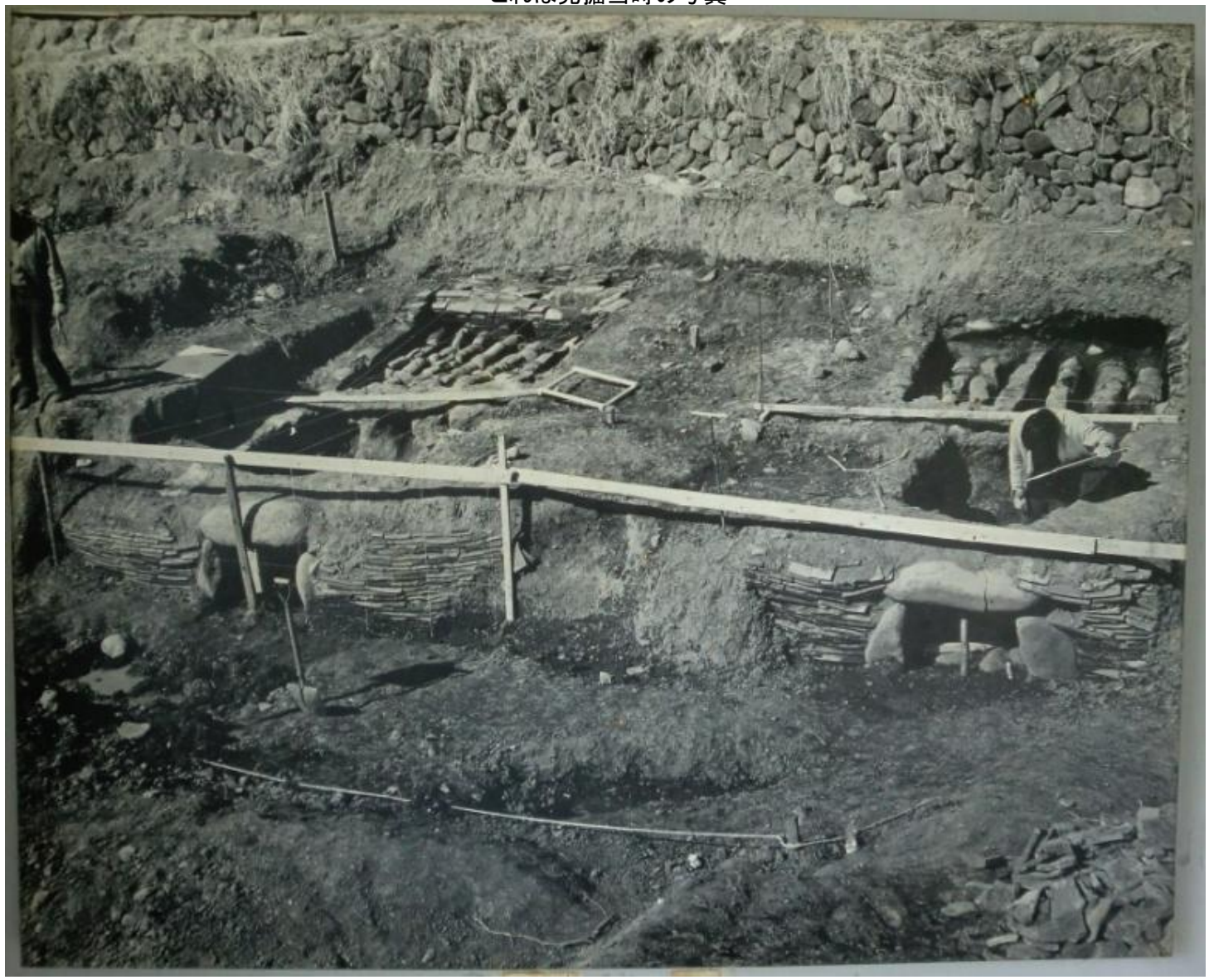
燃焼室はラッパ状に焼成室にむかって広がり、焼成室との境は障壁によって分けられ、下部に三個の通焔孔を設けてある。焼成室は七本のロストルを設け、奥壁内に三本の煙道をつくってある。この焼成室の高さは四囲の壁が破壊されているので明確ではないが、およそ一、三メートル程度と推定される。

また、構築材となっている瓦は国分寺創建時の瓦と本瓦の工人が作製したものの二種であり、操業は平安時代初期における国分僧寺、尼寺の大修理に際して行なわれたと推定され、一回についての瓦焼成数は瓦を三段詰にした場合約五百枚程度と考えられる。

なお、この観察施設は上田市が国、県の補助を得て八百万円の経費で建設したもので、二基の窯跡を鉄筋コンクリート壁で保護し、西側の一基について観察の便を計り、他の一基は床の下に埋め戻されている。

昭和四十八年十月一日

上田市教育委員会

この下を覗くと瓦窯跡がある

これは発掘当時の写真